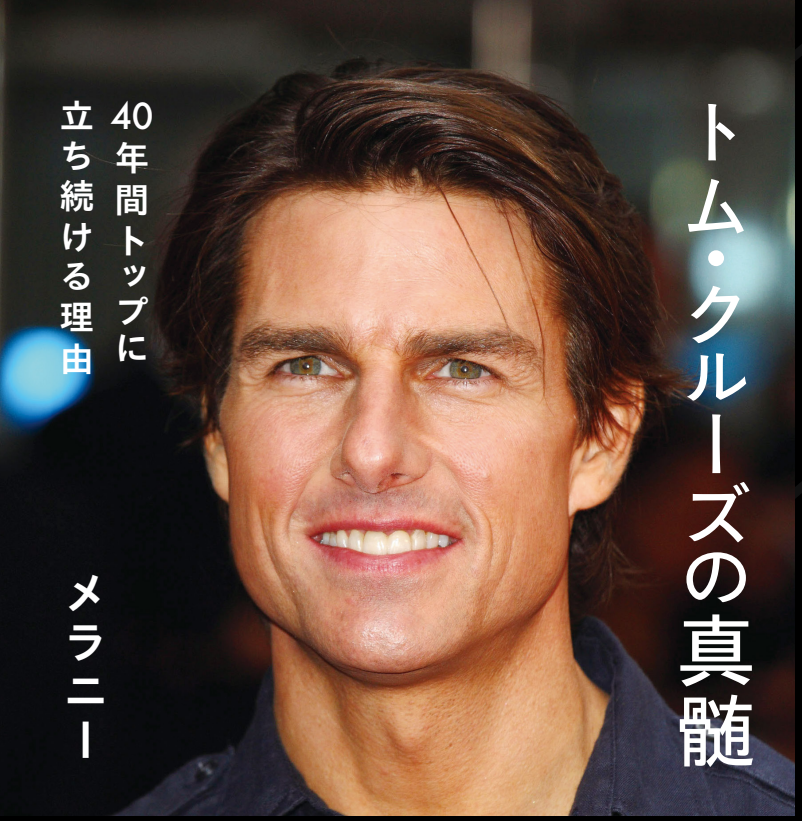


トム・クルーズの真髄

40年間トップに立ち続ける理由

メラニー

映画界の至宝、トム・クルーズはいかに

不可能を可能にしてきたか——

インポッシブル　ポッシブル

トム・クルーズ自身初のオスカー
第98回アカデミー賞名誉賞受賞

映画評論家 町山智浩、推薦！

「誰よりもアカデミー賞に詳しいメラニーさんが誰よりも詳しく、熱くトムクルを論じた！」

トム・クルーズの真髄

40年間トップに立ち続ける理由

メラニー

星海社

372

SEIKAISHA SHINSHO

はじめに

「トム・クルーズについて書きませんか？」

私の初の著書『なぜオスカーはおもしろいのか？』の編集担当、築地さんから連絡を貰ったのは２０２５年６月のこと。トム・クルーズの代表作のひとつ、『ミッション：インポッシブル』シリーズ最新作のメイキング映像を改めて見た星海社編集部で、この規格外の俳優について誰かが言語化すべきであるという意見が出て、以前から情熱的にトム・クルーズを語っていた私に白羽の矢が立ったというのがこの本のはじまりである。ここ20年、トム・クルーズを「目が離せない存在」として追って来た私にとっては願ってもないオファーであり、二つ返事で快諾した。

その２週間後、今年のアカデミー賞名誉賞が、トム・クルーズに授与されると決まった。

いよいよ書かない理由はないと、使命にも似た感情を覚えた。だが同時に、偉大な重責に胃の痛さも感じた。私は本業として映画業界に30年近く関わってきたとはいえ、トム・クルーズに会ったこともなければ、熱狂的な〝トム・クルーズファン〟というわけでもない。特定数のマニアしか興味を持たないオスカーと違い、世界中の誰もが知っている人物を題材に、分析などして良いものだろうか。私よりよっぽど彼のことを好きな人も、彼について詳しい人もいるであろう。

動画が自由に見られる環境になったここ10余年、私はことあるごとにトム・クルーズの映像を見て来た。それは作品プロモーションのインタビューや映画のメイキング映像だったり、はたまたレッドカーペットの様子だったり、さまざまな場面の彼の姿だったが、そこにいるクルーズは常に、紳士で誠実で一生懸命で、見始めるとやめられないものばかりだった。私の中で、トム・クルーズという存在が特別であることは間違いない。それならば、ファンでも関係者でもない一般人の一意見として、客観的に享受するトム・クルーズという人物を分析すれば良いのではないか――そういう思いに至った。

トム・クルーズ――

唯一無二、前代未聞、世界一のスター、最後の映画スター――トム・クルーズは様々な形容詞で賞賛されるスーパースターである。私たちが彼に惹かれてやまないのはなぜか。私は、それは彼が、私達が理想とする生き方を体現し、目標を掲げ、それを有言実行し続けているからではないかと思う。40年の間、進化し続け、常に新しいハードルに挑戦し克服し続ける彼は、私たちに夢と希望を与えてくれる。次に期待する私たちを、トム・クルーズは絶対に裏切らない。そんな超人的な魅力を持つ彼はいかにして出来たのか。果たしてトム・クルーズの何が、どう凄いのか。

トム・クルーズを形容する〝スター〟という言葉の中には、彼の色々な顔が隠れている。俳優として、ビジネスマンとして、人間として、彼の何が特別なのか。この本では3つの観点から分析し、彼の魅力に迫ってみたい。

目次

はじめに 3

第1章 俳優 トム・クルーズ 10

大器の予感――〝俳優〟トム・クルーズの誕生 12

リドリー&トニー・スコットとの邂逅 20

巨匠スタンリー・キューブリックとの挑戦 25

スピルバーグとの運命の出会い――スター同士の化学反応 29

クリストファー・マッカリーという〝転機〟 32
名優の引き立て役――共演俳優をオスカーに導く 37
大ヒット作と並行して訪れるアカデミー賞へのジレンマ 43
不動のスーパースター、オスカー冷遇でも輝く 49
『トップガン　マーヴェリック』というゲームチェンジャー 53
知識、技術、フィジカルの結晶――『ミッション：インポッシブル』シリーズ 56
作品を極めるクルーズの哲学 60
キャリアの途上に襲ったブレーキ 64
代えがたい宝物――クリストファー・マッカリー 68
クルーズの規格外スタントの幕開け――『ゴースト・プロトコル』 71
M：Iシリーズ、金字塔の30年 76
ジョセフ・コジンスキーが掛けた魔法――『トップガン　マーヴェリック』 80
若き才能を導くクルーズの新境地 85
パンデミックを打破したクルーズの信念 90
トム・クルーズ出演映画作品ショートレビュー Part.1 94

第2章 プロデューサー トム・クルーズ 100

兼ね備えていた映画製作への鋭い洞察力 102
クルーズの〝契約革新〟が常識を変えた 105
芸術とビジネスを融合した才覚 106
徹底したセルフプロデュース 109
スタントを〝自分でこなす〟究極の理由 115
奇跡の二人――マドンナとクルーズ 118
いまだ頂点に君臨し続ける驚異の存在 123
真逆のアプローチで支持される二人 129
クルーズはつまらない俳優？ 132
〝バッドボーイ〟ブラッド・ピットの存在 135
前代未聞の宣伝活動――コロナ禍の『テネット』劇場公開 139
「すべての作品を劇場で！」 142
映画界を救う、常識外れの発想 146

トム・クルーズ出演映画作品ショートレビュー Part. 2 148

第3章 人間 トム・クルーズ 154

「ディスレクシア」との闘い 156
「弱さは言い訳にならない」というマインド 160
クルーズの恋愛事情 164
〝三枚目〟もこなすパーソナリティー 166
イメージコントロールの徹底 168
どうしようもなくかっこいい 171
世界を駆け巡る〝クルーズケーキ〟 174

参考文献及びウェブサイト一覧 183

おわりに 187

第1章

ーズ

n Actor

彼の動きは綿密に振り付けられているのに、完全な即興に感じる。時計の針のように 計算されているのに、ジャズのように流れて行く。（見ている）僕は鳥肌が立った。

―― **アレハンドロ・ゴンザレス・イニャリトゥ**

俳優

トム・クル

Excellence as a

大器の予感――〝俳優〟トム・クルーズの誕生

トム・クルーズは、何においても第一に、〝俳優〟である――まずはこの大前提から始めていきたい。

トム・クルーズのフィルモグラフィーを見てまず感心するのは、今まで出演してきた作品における監督の顔触れである。二世俳優や子役出身俳優が、青年期を過ぎた頃から一流監督に起用されるのは良くある話だが、クルーズのように、17、8歳でゼロからスタートした俳優が、最初から最後まで錚々たる監督と組んでいる（しかも主演として40年間にわたって）という例は、私は他には見た事がない。ひとまずここに、彼の出演作順に監督名を記す。

フランコ・ゼッフィレッリ（『エンドレス・ラブ』）

ハロルド・ベッカー（『タップス』）

カーティス・ハンソン（『爆笑!? 恋のＡＢＣ体験』）

フランシス・フォード・コッポラ（『アウトサイダー』）

リドリー・スコット（『レジェンド』）

マーティン・スコセッシ（『ハスラー2』）

トニー・スコット（『トップガン』『デイズ・オブ・サンダー』）

バリー・レヴィンソン（『レインマン』）

ロジャー・ドナルドソン（『カクテル』）

オリヴァー・ストーン（『7月4日に生まれて』）

ロン・ハワード（『遥かなる大地へ』）

ロブ・ライナー（『ア・フュー・グッドメン』）

シドニー・ポラック（『ザ・ファーム』）

ニール・ジョーダン（『インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア』）

ブライアン・デ・パルマ（『ミッション：インポッシブル』）

キャメロン・クロウ（『ザ・エージェント』『バニラ・スカイ』）

スタンリー・キューブリック（『アイズ ワイド シャット』）

ポール・トーマス・アンダーソン（『マグノリア』）

ジョン・ウー（『M：I-2』）

スティーヴン・スピルバーグ（『マイノリティ・リポート』『宇宙戦争』）

エドワード・ズウィック（『ラスト　サムライ』『ジャック・リーチャー』）

マイケル・マン（『コラテラル』）

J・J・エイブラムス（『M:I-3』）

ロバート・レッドフォード（『大いなる陰謀』）

ブライアン・シンガー（『ワルキューレ』）

ジェームズ・マンゴールド（『ナイト&デイ』）

ブラッド・バード（『ミッション:インポッシブル　ゴースト・プロトコル』）

クリストファー・マッカリー（『アウトロー』『ミッション:インポッシブル』シリーズ5〜8）

ジョセフ・コジンスキー（『オブリビオン』『トップガン　マーヴェリック』）

ダグ・ライマン（『オール・ユー・ニード・イズ・キル』『バリー・シール』）

アレハンドロ・ゴンザレス・イニャリトゥ（『DIGGER／ディガー』）

トム・クルーズのデビューは、ブルック・シールズ主演の青春ドラマ『エンドレス・ラブ』の端役であった。監督はフランコ・ゼッフィレッリである。『ロミオとジュリエット』でオスカー作品賞にもノミネートされた大物監督作品がデビュー作で、その作品で既に2、3の台詞がある役柄というのは特筆すべき事実である。高校中退後、単身ニューヨークに渡り、俳優を夢見てローカルの舞台に立っていた彼が受けた、初めての映画のオーディションが『エンドレス・ラブ』だった。このオーディションの前にクルーズは、テレビドラマのオーディションに「圧が強すぎる」という理由で落ちている。クルーズ、この時17歳。多くの俳優がいくつものオーディションを受け、役を貰うまで時間を要する中、田舎出身でほとんど何の経験もないクルーズが最初の作品で役を射止めるというのは、この先の成功を示すような出来事であった。『エンドレス・ラブ』のクルーズには、後の洗練された美

しさはまだないが、彼の鍛えられた身体とあどけなくも美しい顔は、ゼッフィレッリの心をつかんだのだった。

俳優として本当の意味でクルーズを発掘したのは、出演2作目『タップス』で彼に大役を与えたハロルド・ベッカーと言われている。クルーズ自身『タップス』は自分の「最初の作品」と常に話しているが、この作品での彼の役柄は、ティモシー・ハットン、ショーン・ペンに次ぐ3番手の大役だった。当初のインタビューから最近に至るまで、自分の仕事に関する素地はこの作品への出演で作られたとクルーズが言う通り、彼はベッカーはじめ熟練スタッフから、映画作りのいろはを学んだ。１９８１年の『タップス』は、とあるミリタリースクールを舞台にした作品で、ジョージ・C・スコット演じる学長が率いるこの学校が学資不足で閉校することになり、それに反対した学生たちが武器を持って立てこもりを起こすという内容である。前年にアカデミー賞助演男優賞を最年少受賞したティモシー・ハットンが学生のリーダーを演じ、そのルームメイトとしてショーン・ペン、過激な同級生としてトム・クルーズが出演している。ハットンはオスカー受賞までしているスター俳優だったが、ペンはこの作品がデビュー作で、クルーズと並んで緊張と希望に満ち

た新人だったとのこと。子供の頃から映画に出ることを夢に見て来たクルーズにとって、〝本物のパットン大佐〟ジョージ・C・スコットとの共演は夢のようなことだったであろうし、「とにかく圧倒されていた」と本人は語っている。

年の近いハットンやペンとは仲良くなったものの、ロサンゼルスで育ち、親を業界に持つ二人と比べて自分はかなり遅れを取っていると感じたクルーズは、とにかく映画について学ぶことで、一刻も早く一人前の俳優になろうとした。彼は、脚本家や監督、撮影監督を始め、小道具、大道具から照明、衣装に至るまで、あらゆる部門のスタッフに話を聞き、映画制作の隅々に渡るまで全てを理解しようとした。最近のインタビューでも「芸術の源泉は技術」と言うクルーズは、「知識と技術を身につけなければ、映画作りに貢献は出来ない」と考える。彼は、18歳の現場で既に、この信条を確立した。映画が作りたくて、この現場にいられる幸せをかみしめている18歳は、一分一秒も無駄にするまいと必死だったに違いない。『タップス』撮影時「ペンと自分はずっと映画の話をしていてほとんど寝なかった」と言うくらい、彼はエネルギーに満ちていた。

クルーズは映画学校に行ったわけでもなく、演技の勉強もしたことがない。彼に欠けているものがあるとしたら、それは学校教育だろう。しかし、クルーズはそれを埋めるために、映画制作の現場で徹底的に勉強した。子供の頃から転校が多く、学校になじめたことがない、と言うクルーズにとって、もしかすると十分な教育を受けていないことはコンプレックスのひとつだったのかも知れない。それを補うためか、彼はこの作品でまず映画作りを知るために、脚本、撮影、照明の技術的な部分を理解しようとした。カメラを知ること、レンズを知ることは、被写体となる俳優にとってはマストの知識だと彼は言う。また、良い脚本を読む力がなければ、役柄を知ることは出来ない。すべては映画をベストなものに仕上げるために、彼がベースとして身に着けた知識だ。彼は『タップス』撮影時、毎日集中してすべてを吸収しようとするあまり、眠れなくなり、過剰なストレスから思わず笑いだしてしまったことがあるそうだ。そして、いくら頑張っても分からないことは分からない、出来ないことは出来ないのだから、それを受け入れてベストを尽くせば良いと割り切った。そこから、分からないことを気にせずに、分かる努力をしていく方向に舵を切ったのである。

リドリー&トニー・スコットとの邂逅

次にクルーズが組むのは、『ゴッドファーザー』シリーズで大きな成功をおさめ、アメリカ中の誰もが知る大監督フランシス・フォード・コッポラだ。コッポラは、ティーンエイジャーのバイブル、国民的愛読書だった『アウトサイダー』を映画化することに決め、オーディションを行った。アンサンブルキャスト（特定の主役を設けないこと）のこの作品のオーディションには、アメリカ中の15歳から35歳までの俳優が参加したと言い、コッポラはそれらの若手俳優を一堂に集め、さまざまな役柄を交代で演じさせた。18歳だったクルーズは、ポニーボーイ、ソーダポップ、ダラスなどの役でオーディションを受けたが、結果的に手にした役はメイングループで一番小さいスティーヴ役だった。クルーズは、折れた前歯をそのまま出し、常にエネルギーを爆発させ宙返りやバク転をするクレイジーな不良役を全力投球で演じる。コッポラはクルーズの才能とひたむきさを買い、同じオクラホマ州タルサを舞台にした続編的作品『ランブルフィッシュ』にもクルーズを起用しようとしたが、クルーズは既に『卒業白書』の主演が決まっていた。

『ランブルフィッシュ』を断って『卒業白書』で主役を演じたクルーズはアイドル的存在となり、一気に人気が上昇する。『タップス』『アウトサイダー』後のハリウッドは若手俳優をアンサンブルとして使った青春映画がトレンドで、『アウトサイダー』で共演した俳優たちはこぞってそれらの映画に出演したが、クルーズがアンサンブル作品に戻ることはなかった。彼はイギリスに行き、リドリー・スコット監督作品に主演することを選ぶ。スコットは既に『エイリアン』で人気監督となっており、ファンタジー作品の得意な彼は、自作のストーリーボードでクルーズに世界観を説明し、クルーズを口説いたと言われている。スコットと組んだ『レジェンド』は、興行的にも評価的にも不発に終わるが、クルーズはこの現場で、光とレンズを知ることが、俳優にとっていかに大事なことかを学ぶ。常に被写体である俳優は、どのように映るかを意識しながら演技をしなくてはいけない。これが、舞台での演劇と映画の違いであることを、一番視覚的に教えてくれたのが『レジェンド』のリドリー・スコットだったのだ。また、この作品は彼にとって初めての、水中撮影を経験する作品となった。これらの経験を経て、のちのちクルーズの専売特許となる「自身でやるスタント」が形づくられていくことになる。ロンドンで『レジェンド』を撮影している時にクルーズは、スコットの弟であるトニー・スコットを紹介される。トニー・スコッ

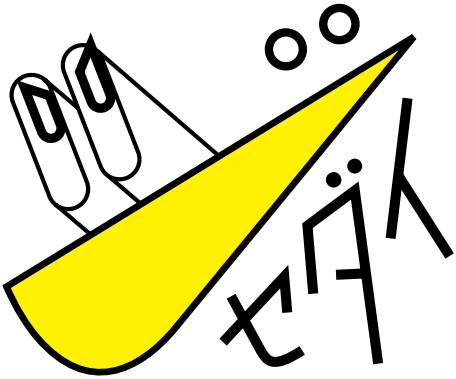
トはそのころ、ＣＭやミュージックビデオを撮っていたが、この出会いが後に『トップガン』を生むことになった。

トニー・スコットは、娯楽作品を撮るのが天才的にうまかった。それはまさに、彼がカメラや音響、音楽といった技術的な面で才能豊かな監督だったからだ。『トップガン』の撮影では、空中での撮影を可能にするために、狭い機内で機能するカメラを開発した。数年後に再びクルーズと組む『デイズ・オブ・サンダー』では、カーレースの緊迫感を撮るためにスピードと振動に耐えられるカメラを作った。迫力のある音響がいかに臨場感をもたらすか、徹底的に研究し、それを可能にする技術を開発した。クルーズは「トニー・スコットが空中撮影を変えた」と言い切る。それまで誰も見た事がなかったスリルとスピードを視覚と聴覚に訴える映像、音響は、トニー・スコットの代名詞となった。その後もスコットが撮る作品は常に、奇抜な映像とセンスの良いサントラで、観客が心の底から興奮し楽しめる作品が続くが、スコットのその地位をゆるぎないものとしたのは『トップガン』だった。そしてその作品の中心にはトム・クルーズがいた。振り返ってみると、２０２５年現在のトム・クルーズという存在の原型を作ったのは、トニー・スコットである。その

後さまざまな監督と組んで良作を生み出したクルーズだが、クルーズが最終的に自己表現の形として選んだスタイルは、トニー・スコットが作ったアクションヒーローだ。『トップガン』も『デイズ・オブ・サンダー』も、いかにトム・クルーズをかっこよく見せるか、という演出に命を懸けている。レーストラックの彼方から、バイクで颯爽と登場する主人公など、他の俳優では恥ずかしくて出来ないような演出を用意し、危険なアクションの末に必ず生還するヒーローという、世界中が憧れるトム・クルーズを創り出したのは、トニー・スコットなのだ。

『トップガン』をきっかけに航空機の操縦免許を取り、『デイズ・オブ・サンダー』ではレースカーを操り、さまざまな技能を身に着けたことはのちに、クルーズの俳優としての可能性を広げた。同時に、『トップガン』制作時のトニー・スコットは、まだ有名監督ではなかった。その後の彼が次々とヒット作を生み出したことは言うまでもないが、『トゥルー・ロマンス』『スパイ・ゲーム』『サブウェイ１２３』といった、スタイリッシュでハイペースな名作は、トム・クルーズとの共作がなければ生まれなかったかもしれない。

スコット兄弟の作品の間に、クルーズは名匠マーティン・スコセッシの『ハスラー2』に出演している。スコセッシもコッポラと並んでアメリカの70年代を代表する監督であり、ロバート・デ・ニーロ主演の『レイジング・ブル』『タクシードライバー』といったエッジの利いた作品でオスカーノミネートも経験していた。『ハスラー2』にクルーズを推薦したのは、主演のポール・ニューマンだったようだが、スコセッシの監督した『ハスラー2』でクルーズは、往年のスターを相手に堂々と演技をし、ニューマンをアカデミー賞の主演男優賞に導いた。『ハスラー2』はニューマンが主導したプロジェクトで、スコセッシ自身ニューマンに誘われた監督だったようだが、本作を監督した際、スコセッシはトム・クルーズを演出することについて「自分の監督した初めての映画スター」だと言っている。ニューマンとクルーズを演出することは、それまでアート映画とみなされる作品を撮ってきたスコセッシにとっても、新しい挑戦だった。スターとはいえニューマンやスコセッシのような大物を相手にした若きクルーズは当初、持ち前の南部紳士の礼儀正しさで二人を「ミスター・ニューマン」「ミスター・スコセッシ」と呼んだらしい。20代の初々しいクルーズの姿が目に浮かぶ。



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!